

2023年度  
入学試験問題

国語

2月1日 午後

| 受験番号 | 氏名 |
|------|----|
|      |    |

中村中学校



問題は次のページからです。

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 申しこみ書をジユリする。
- (2) センゾの墓にお参りする。
- (3) 鉄にジシヤクをくつつけて遊ぶ。
- (4) アイデアがノウリにひらめく。
- (5) お楽しみ会のヒヨウを計算する。
- (6) 中学生になり、さらに心身がハツタツする。
- (7) 綿は燃えやすいセイシツである。
- (8) ねこが家の中をアバレ回る。
- (9) キビしい自然の中に生きる野生の生物。
- (10) 世界中の人びとが平和をノゾんでいる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

体について研究する面白さは、合理的に説明がつかない部分**が**必ず残ることです。

たとえば、私はこの原稿を近所のコーヒーショップで書いています。これまでに執筆した本や記事も、すべてこの店の小さなテーブルで書いてきました。住み慣れた自宅の書齋や職場である大学の研究室で、仕事をすることができないのです。

その理由を言うことはできません。「ある目的のためにしつらえられた場所」が苦手なのです。研究するための部屋に**いると** **i** してしまつて集中できないし、書くための机だと思つて違つたことをしたくなつてしまふ。「しつらえられた場所」に**いると**、なんだか台本どおりに演じている俳優のような、こそばゆい気分になつてしまふのです。① コーヒーショップでは対照的に、空間にまぎれることが

10

できます。隣となりの机では安定期に入つた妊婦さんにんぶが弟のハワイでの結婚式けつこんしきに出席するべきかどうか友達と議論していますし、反対側では高校生の一団が試験勉強をしています。みんなが私に無関心。こうした **ii** した雰囲気ふんいきのほうがいいつて自分のすべきことに集中できるし、原稿に行き詰まつたとしても、周囲を見回せば、適度に刺激しげきがあつて筆が進みます。

書くというのはどうしても生理的な側面のある行為こういです。自分にとって快適な環境かんきやうを整えなければ、うまく言葉が生まれてきません。

調子の波もあります。いいときは一気に原稿用紙一〇枚以上進むのに対し、そうでないときは**一**行も進まないままパソコンのバッテリーだけが虚しく減つていきます。

その意味では、書くというのは行為というより出来事みたいなものかもしれません。予定通り、思い通りには決して進まない。波に乗れるか乗れないかは自分のコントロー

30

ルの及ばないところおよウで決まります。ほとんど賭けかのような感覚です。

だからこそ、せめて環境を整えたいのです。自分の体を

うまく「乗せる」ために、できるだけのことはしたい。一

時期「ノマドワーカー」という言葉が流行はやりました。私は 35

「ノマドじゃなきゃだめワーカー」。どうしても自宅で仕

事をしなければならエないときには、キッチンの隅すみやベッド

の上でこつそりラップトップパソコンを広げる「家庭内ノ

マド」になります。

こんなふうには、私は自分の「書く」という行為／出来事 40

について分析ぶんせきすることができません。一〇〇パーセントうま

くいかなくても、「自分に書かせる」ための方法がある程

度自覚しているし、そこにどのような法則があるか言語化

することもできます。

③ しかし、この私の説明は、明らかに合理的なものではあ

りません。

なぜ、私はコーヒーシヨップだと原稿が書けるのか？

「しつらえられた場所が苦手」とか「周囲の会話がいい刺  
激になる」とか、もっともらしい理由をあげることはでき  
ました。

A、それらは決して科学的な根拠こんきよに支えられたも

のではありません。いつ、だれに対しても妥当だとうするような

理由ではないのです。「合理性」が「普遍性ふへんせい」を意味する

ならば、この法則は明らかに不合理なものです。

現に、知人にこの話をしたら、「自分は絶対にコーヒー 55

シヨップでは書けない」という答えが返ってきました。そ

の人は小説を書くのですが、書くときは必ず自分の書齋に

こもる、と。研究室ではどうなのかと聞くと、研究室では鍵かぎ

をかけても無理なのだそうです。

B、書齋にいたとしても、集中するために一時間 60

もの準備時間がかかるといいます。年をとるにつれ、準備

時間が次第しだいに長くなってきた、とも。

C、その知人には「コーヒーショップだと書ける」

の法則は通用しないのです。

私とて、「書ける法則」が、きつと人によつて千差万別<sup>④</sup>である

65

であろうことは理解しています。「テレビをつけながらじやないと書けない」という研究者は案外多いですし、「まじめに話を聞いているわけじゃないけど友達と電話しながらレポートを書く」という学生に出会ったこともあります。

しかも、納得<sup>なっとく</sup>しがたいことに、自分と同じ理由で逆の結

70

論にたどり着いている人もいる。「自宅だと刺激があつて書ける」とか「コーヒーショップは仕事をする場所という感じで逆に落ち着かない」とか……。

あらためて、なぜ、私はコーヒーショップだと書けるのか？

75

その理由は、もはや「そうなってるから」としか言いようがありません。

コーヒーショップの法則を支えているのは、私の個人的<sup>⑤</sup>

な経験の厚みだけです。

それはいわば、断崖<sup>だんが</sup>にあらわれた地層のようなもの。地

80

層がそのような順で重なっていることに、理由はありませ

ん。あくまで火山の噴火<sup>ふんか</sup>や地殻変動<sup>ちかく</sup>といった地学的イベ

ントの結果として、そのような地層が出来上がっただけです。

同じように、私のコーヒーショップの法則も、私のこれ

までの「書く」という経験が積み重なった結果、そのよう

な法則らしきものができあがっているだけです。

推測を交えて言えば、おそらくたまたま、あるときコー

ヒーショップで原稿を書いたら驚<sup>おどろ</sup>くほどうまくいった、

ということがあつたのでしよう（それはたぶん、学部生で

卒論を書いていた頃<sup>ころ</sup>のことです）。

そのうまくいった記憶<sup>きおく</sup>が、<sup>⑥</sup>験担<sup>げんから</sup>ぎのようなものとして、

行為の反復<sup>うなが</sup>を促します。コーヒーショップに行けば書ける、

コーヒーショップに行けば書ける……。そして気づけば習慣は強化されていて、いつしか「コーヒーショップじ

90

やないと書けない」と法則化するに至ったと思われれます。 95

その意味では、この場合の法則は一種の自己暗示のようなものとも言えます。「やなぎの下のどじょう」式に成功体験を反復しようとして、こうすれば書ける、と信じこもうとしているのかもしれませんが。

重要なのは、そうだとしてもやはり、法則は必要だ、ということなのです。

いかに他人から見れば不合理な内容だったとしても、私たちは、自分の体とつきあうために、さまざまな法則を見出さずには生きていけません。

体は完全には自分の思い通りにならない対象です。落ち

着かなきゃと思えば思うほど緊張したり、睡眠不足なのに目が冴えて眠れなかったりする。そんなコントロールしきれない相手とそれでも何とかつきあおうとするためには、仮のものであったとしても、なんらかの法則を見出して対処するしかありません。

110

(伊藤亜紗『記憶する体』春秋社)

※ノマドワーカー……自宅や会社のオフィスではなく、喫茶店やファーストフード店などでノートパソコンやタブレット型端末を使い、仕事をする人。

問一

i

ii

記号で答えなさい。  
に入る言葉をそれぞれ次から選び、

ア、じわじわ                      イ、そわそわ  
ウ、ざわざわ                      エ、ふわふわ



問二 —— 線①とありますが、なぜですか。最も適当

なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、周りの人々もそれぞれの仕事に集中しているため、

お互いに刺激を与え合って作業に没頭できる気がするから。

イ、色々な目的を持った人が集まった空間では、誰も

自分に興味を持たず、仕事に没頭できる気がするから。

ウ、一人でいる空間だと孤独な気持ちかしてついそわ

そわしてしまう自分にとって、集団にまざることが心の支えになるから。

エ、自分の目的に合った机などが完備されていて、周

りを見渡せば雑談をしている周りの人々の様子が適度な刺激になるから。

問三 —— 線ア、エの内、性質の違うものを一つ選び、

記号で答えなさい。

問四

—— 線②について、「自分の体をうまく『乗せる』」ことの具体例として、明らかに適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、勉強に集中するために目の前にお気に入りの文房具を並べる。

イ、大人に混じっていた方が背伸びした感じがするの  
で図書館で勉強する。

ウ、漢字を勉強するとき、前回五回では覚えられなかった  
ので今回は十回書く。

エ、家で勉強するときも制服を着ると、中学生だと思  
えてしやきつとする。

問五 ——— 線③とありますが、なぜですか。文中の具体例に触れながら、二十五字以上三十字以内で説明しなさい。

問六   に入る語として適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア、つまり
- イ、さて
- ウ、でも
- エ、しかも

問七 ——— 線④について、「千差万別」と似た意味で用いられる四字熟語を次の内から一つ選びなさい。

- ア、十人十色
- イ、朝三暮四
- ウ、一期一会
- エ、四苦八苦

問八 ——— 線⑤について、この場合の「個人的な経験」を説明したものととして最も適当なものを次から一つ選び記号で答えなさい。

- ア、長い間成功と失敗を繰り返してきた経験
- イ、心理学的な法則にしたがって必然的にうまくいった経験
- ウ、毎度うまくいくように訓練を重ねた経験
- エ、これまでに同様の状況でうまくいった経験

問九 この文章には、「究極の  」という副題がつけられています。本文の文脈から考えて  に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

- ア、メンタルヘルス
- イ、フィジカルパワー
- ウ、ローカルルール
- エ、グローバルビジネス

問十

—— 線⑥とありますが、あなた自身にもこのような「行為の反復」があると思います。あなたはどのような「行為」を「反復」していますか。またそれはどのようなことがきっかけになっていますか。具体的に説明しなさい。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

高校卒業後家を出て東京で就職した貴志は、何かと理由をつけて実家に帰っていなかった。それでも母の日や誕生日には贈り物をかかさなかった。しかし、一人暮らしの母が入院したことをきっかけに、妻の靖子と共に帰省することになった。医師から聞いた母の検査結果は重く、貴志は気持ち落ち着かないまま病室に戻った。病室に入ろうとすると母と靖子の会話が聞こえてくる。

トイレに向かう年老いた入院患者が、ゆっくり私の前をお辞儀しながら歩いて行く。

「靖子さん、その引き出し開けてもらえる？」

「この引き出しですか？」

靖子が引く引き出しのキツと擦れた音が聞こえる。

「その中に、赤い布袋があると思うんだけど」

「布袋ですか？ あ、はい、ありました」

「中に、口紅があるでしょう？」

「はい」

「それね、あたしのお守りなのよ。貴志が小学生の……あれは四年生だったかな。母の日にくれたの」

「ま、貴志さんが」

「今度、授業参観に来るときは、それをつけて来てくれて言われたのよ。いつもあたしが見窄らしい格好ばかりしてたから、不憫になっただんじやないのかね」

口紅……。小学四年……。母の日……。

遠い記憶がその言葉に引つ張られるように、私の頭の中に浮かんできた。

そうだ。私が母に贈ったものだ。

小学四年のとき岡田明紀という級友がいた。

町には中心部に住む「町の子」と呼ばれた子どもたちがいた。大概は会社勤めや目抜き通りに店を構えるうちの子

で、比較的裕福な家庭の子を意味した。その中でも明紀は普段からぱりつとした半ズボンと白いシャツを着ていた。<sup>②</sup>

明紀の母親は、学校の行事で学校を訪れるとき、きちんと化粧をし、濃紺のスーツ姿でやって来た。マセた女子の間では「明紀くんのお母さんは綺麗だ」という評判になつていた。

ある日、明紀が自慢するレーシングセットを見るために、数人の級友と町の高台にあつた明紀の家に行くことになつた。

よく手入れされた垣根に囲まれた家も美しく感じたが、通された居間の整理整頓された様には驚かされた。きよ

ろきよと見渡すと、テーブルの上には白いレースのクロスが敷かれ、革張りのソファが置いてあつた。我が家には無縁の物ばかりだつた。私は急に気後れし、慌てて穴の開いた靴下の先を引っ張つて隠した。

私の母は掃除が苦手というより、そういう能力が欠如しているのではないかと思うくらい部屋の中は足の踏み場もなく物が散乱し、食卓として置かれたコタツは一年中、部屋から片づけられることはなかった。

明紀の母親は、薄茶色のスカートに白いブラウスを着ていて、特別な日でもないのに化粧をしていた。その唇には口紅が塗られていた。「召し上がれ」と、おやつに出されたイチゴのショートケーキを、慣れないフォークを使いこなせず横倒しにしてしまい恥ずかしい思いをした。

随分経つてから人伝に聞いた話だが、明紀の母親は東京から嫁いできた人だつた。

子どもの淡い、いや悪かな願いだつたのかもしれないが、口紅をつければ私の母も明紀の母親のように綺麗になれるのではないかと思つた。

翌日、私は和泉屋へ自転車走らせ、化粧品売り場で口紅がいくらか下見をした。ガラスのカウンターの上

に、口紅は並べてあった。私がへばりつくようになっている  
と、店員に怪訝けげんそうな顔をされた。

私が予想していたものより遥はるか上の値段に落胆らくたんした。

いつそのこと、隙すきを見て盗ぬすんでしまおうかとも思ったが、  
とてもそんな度胸はなかった。

お年玉の残りでは足らず、何日か思い巡めぐらせた結果、瓶びん  
集めを思いついた。当時、清涼飲料水せいりょうようの空き瓶を店に持

って行くと十円になった。それからしばらくの間、友だち  
からの遊びの誘よそいも断って、家に帰ると自転車を漕こいで物  
色でかに出掛けた。

町工場が集まった地区には、ブロック塀べいの上に、若い工

員へんきやくが返却めんどうを面倒がって放置したコーラの瓶があつた。道

端はたにはたんぽぽの花に混じって、捨てられた瓶が土に突き

刺ささるように埋うまっていた。それらを集めては水道の水で、

一生懸命汚いっしょうけんめいれを落とし、それから商店へ持ち込み、換金

した。

70

同じ店ばかりに持ち込むとへんに思われそうだったの  
で、自転車の籠かごに幾いくつか積み込んで、離はなれた商店へも  
運んだ。

母の日の数日前、私は十円でパンパンになったビニール  
袋かかを抱え、和泉屋へと向かった。

店員のおばさんに「母の日のプレゼントにするんだ」と  
告げると、小銭こぜにを数えることも嫌いやがらず、綺麗な包装紙で  
口紅を包んでくれた。

私は母の日にその口紅を母に手渡し、次の授業参観は口  
紅をつけてきてくれと頼たのんだ。

母の目にはみるみる涙なみだが溜たまり、母は私を抱だきしめる  
と何度も「ありがとうね、貴志」と言い、髪の毛がくしゃ  
くしゃになるほど頭なを撫なでた。

私は子どもながらに、大きな仕事をやり遂とげたような満  
足感と、感謝される喜びを初めて味わった。

……そんな遠い記憶きおくが、蘇よみがえった。

85

80

75

「貴志が買ってくれた口紅は、参観日に一度使ったきり、<sup>⑥</sup>あとはもつたいたいなくて使えなかった……。でもね、<sup>⑦</sup>ずっとあたしのお守りになってるんだよ」

「お義母さん、それでよかつたんですよ」

「実はね、近所のお店の人から聞いてたの。あの子が、空き瓶を集めてお金に換えてるって。何でそんなことをつて恥ずかしい気がしたんだけど、そのお金で口紅買ってくれたんだから、<sup>⑧</sup>恥ずかしいなんて言ったら罰が当たつちゃうところだつたね」

母は知っていたんだ……。今思えば、だから「これはどうやって手に入れたんだ？」と尋ねることもしなかったの  
だろう。

「淋しいときも苦しいときも、その口紅を見ると頑張れたの」

「お義母さん、泣かないで下さいよ。私、もらい泣きしちゃうじゃないですか」

100

95

90

「ああ、ごめんなさいね」

病室の様子は見ることはできないのに、ふたりの表情が手に取るように分かる。

「靖子さん、ひとつお願いがあるんだけど」

「はい……」

「あたしが死んだときには、死に化粧にこの口紅を使つてもらえないかね？」

「何を言い出すんですか、もう」

「だから、もしものときにね……。それと、こんな古い口紅、形見に残してもしようがないから、一緒にお棺の中に入れてほしいの。そうすれば、あたしもいくらか淋しくないし。ねえ、だから靖子さん、お願いね、そうしてもらえない？ 本当にお願ひね」

靖子に懇願する母の声に居たたまれなくなった私は後退りするようにその場を離れた。非常口の扉を開け外階段の踊り場へ出ると、胸に詰まった重苦しさを全部吐き出

115

110

105

し、深く大きく息を吸った。

微かに赤味の残った空に『夕やけ小やけ』のメロディが流れ、晩秋の冷たい風が錆びた鉄柵の隙間から私の頬に吹きつけてくる。

気を落ち着かせようとし、上着の内ポケットから煙草を取り出すと、その一本をくわえた。ライターを添えたが、胃の方から咽び上がる感情に唇が震え、煙草は小刻みに上下し、うまく火が点けられない。くわえた煙草を右手で取り、そのまま掌の中でくしゃくしゃに握りしめると、もう一方の掌で、震える声を封じ込めるように口を覆った。

贈った本人でさえ忘れていたたった一本の口紅が、ずっと母の支えになっていたとは……。

少年だった私の方が、何倍も母を喜ばせていたと思うと、急に今の自分がちっぽけな人間に感じられた。

ただ、贈り物も温泉も、母に喜んでもらいたかったただけだ。そして、そういうことができるようになった私を「立

派になった」「よく頑張った」と褒めてほしかった……。

靖子が言うように、歳をとって素直な気持ちの口でなくなり、子ども、いや私の心根にはいつも、母に褒められたいという思いがあった。

その場に座り込みうなだれると、大粒の涙が頬を伝い、ぼろぼろと足元に落ちてゆく。もうそれを止める術はなかった。

⑨ 私は声を漏らしながら泣いた。  
「くううう、おかあちゃん……」

もしも、口紅をあげたあの日の私に戻れるなら、母に一体何をしてあげるだろうか？ 今となつてはやさしい言葉を掛けてあげるくらいしかできそうもない私が歯痒く思えた。が、せめて病室に戻ったら「オレが傍にいる、だから何も心配はいらない」と言い、母の手を摩ってあげよう……。頬を濡らす涙を無造作に拭いながら私はそう思った。



（森浩美「おかあちゃんの口紅」

『家族の言い訳』双葉社所収）

問三 —— 線②とありますが、同じ意味で使われている文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、ガラスがぱりつと割れる。
- イ、ぱりつとした一万円札。
- ウ、ピザの生地がぱりつとしている。
- エ、ぱりつとしたおせんべい。

問一 〰️線ア、エのうち、性質が異なるものを一つ

選び、記号で答えなさい。

問四 〰️線 a、b はどのような意味ですか。それぞれ

一つ選び、記号で答えなさい。

- a ア、流行り物好き
- イ、興味がない
- ウ、いじわるな
- エ、大人びている

問二 —— 線①とありますが、同じ意味の言葉に言いか

えなさい。

- b ア、まぶしく見え
- イ、自信がなくななり
- ウ、興味がわき
- エ、気が大きくなり

問五

——線③とありますが、どうして貴志はこれらの物が自分の家には無縁だと思ったのですか。考えられる理由を二つ挙げ、それぞれ二十字以内で答えなさい。

問七

——線⑤とありますが、この時の貴志の気持ちとして適当なものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア、母におしやれをしてほしい。

イ、美しい家に似合う母でいてほしい。

ウ、高価なもの一つくらい持っていてほしい。

エ、自分自身の身なりも気にかけてほしい。

問六

——線④と同じ構成の熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、登山

イ、花束

ウ、温暖

エ、腹痛

問八

——線⑥とありますが、母がこのように思ったのはなぜですか。説明しなさい。

問九

——線⑦とありますが、

I ここでの「お守り」とは何を指していますか。

II それがお守りとなつてゐることが具体的に表現されてゐる箇所をかしよこれより後から二十五字程度で探し、最初の五字を答えなさい。

問十 ——— 線⑧とありますが、母がそう思った理由を説

明した次の文の（ A ）（ B ）に当てはまる  
言葉を答えなさい。

貴志が（ A ）ことを近所の人に知られ、一時は  
恥ずかしく思ったが、それは（ B ）ことだったの  
で、恥ずかしいなんて言ったら貴志に申し訳ないから。

問十一 ——— 線⑨とありますが、「私」のどのような気

持ちが考えられますか。適当なものをすべて選び、  
記号で答えなさい。

ア、これからは母に対してできることをしていこう  
と決意する気持ち。

イ、プレゼントしたものを大切にしてくれていたこ  
とを嬉しく思う気持ち。

ウ、靖子に話したくなかったことを話されて気恥  
かしく思う気持ち。

エ、素直にならずに冷たい態度をとっていたことを  
後悔する気持ち。

オ、死んだ後のお願いを靖子にだけしたのを悔しく  
思う気持ち。